

Q-8 国の教育政策の動きは、日々の授業とどうつながるのでしょうか？

現在、国では次期学習指導要領に向けた議論が進められており、中央教育審議会教育課程企画特別部会では、今後の教育課程の方向性について論点整理が示されています。文部科学省は、その要点を分かりやすく整理した概要版・詳細版の資料も公表しています。

ここでは、その中でも日々の授業づくりに関係しそうな視点を整理してみます。

① 〈何を教えるか〉 から **どのように学ぶか** へ

授業づくりでは、「どの内容を扱うか」、「どの知識・技能を身につけさせるか」が中心になりがちでした。もちろん、教科の知識・技能を身につけることはこれからも大切です！

それに加えて、「どのような問いをもつか」、「どのように考えるか」、「どのように表現するか」、「どのように振り返るか」といった、学びの過程がより重視されていきます。これは、BS版 No.3で紹介した「学びのアクション」ともつながります。

② 〈個別の知識〉 から **概念でつながる理解** へ

学習内容は、単元ごと・教科書の項目ごとに、個別の知識として扱われることが多くありました。

個別の知識をただ覚えるだけでなく、それらを支える**中核的な概念**に着目することが重要になります。論点整理でも、各教科等の内容をどのように構造化するかが検討されています。

たとえば、「構造」、「変化」、「因果」、「証拠」、「視点」、「システム」といった見方で内容を整理すると、学びは他の内容や他教科ともつながりやすくなります。これは、BS版 No.5で紹介した「学びのレンズ」と重なる考え方です。

③ 〈結果を見る評価〉 から **過程を見取る評価** へ

評価というと、テストの点数や提出物の完成度など、学習の結果を確認するものとして捉えられがちでした。

結果だけでなく、学びの過程を見取ることも重要になります。たとえば、どのような問いを立てたか、どのような根拠を示したか、他者の考えをどう取り入れたか、学びをどう修正したかといった姿です。これは、BS版 No.7で紹介した Assessment の考え方とつながります。

④ 〈大きな改革〉 から **持続可能な工夫** へ

教育改革というと、「新しいことを大きく始めなければならない」という印象を持たれがちでした。

国の議論でも、質の高い学びだけでなく、多様性の包摂や実現可能性の確保が重要な方向性として整理されています。

探究的な学びや教科横断的な学びも、すべての授業を大きく変えることではありません。問いを一つ加える、生徒の考えを一度共有する、他教科とのつながりを一言添える、振り返りを短く書かせる。そうした小さな工夫から始めることができます。

国の教育政策の動きは、日々の授業から遠いものではありません。むしろ、これまでBS版で紹介してきたことと重なる部分が多くあります。

国の教育政策は、新しいことを一方的に求めているわけではありません。本校がこれまで取り組んできた授業改善の方向性を、より確かなものにするヒントとして捉えていきたいものです。